

きもちは、 言葉を さがしている



第5話

水野 スウ

奇跡みたいな日常

「紅茶の時間」から生まれたコミュニケーションの学び、「とも時間」の練習風景を、マガジンでこれまで何回か綴ってきた。今回はその話をお休みして、チェルノブイリ後の「紅茶」で語りあわれたこと、20数年前から発行してるミニコミ「いのちの未来に原発はいらぬ通信」のこと、原発に関心を持ち出してからの私の内なる変化や、3.11後の今現在、私が思ってること、などについて書いた。

今回の出来事は、8,000キロのへだたりと距離感があった25年前とは違い、日本中がある意味、現地となり、すべての人が、多かれ少なかれヒバクの当事者になってしまった、ということなんだと思う。

地震と津波と原発震災のあとの、まだ早い段階で強く感じていたのは、それまでの何気ない日々のいとなみ——その多くが、水と土と空気に依って立つところの——や、いつもそばにいることを

当たり前にも思ってたひとの存在、そして、今度いついつ会おうね、と約束して、その約束通りにまた誰かと会える、ということ、などがほんとはどれも奇跡に近い、すごいことだったんだ、ということ。

それまでも私なりに大切にしてきたつもりの「一期一会」の意味が、格段に深くなり、貴重になった。はじめてのひとと不思議なご縁で逢えた時、または懐かしいひとと再会をはたせた時、別れぎわに思わず、何かもうひとこと言わずにおれなくなった。次に会ったとき言えばいいや、的なきもちの伝え残しはなるべくせずにおこう、遠くのひととも、一番身近なひととも。

そんな風に思っている私の日々は、きっと前よりも少し密度が濃い。そしていっそう、きもちを伝えること、伝えあうことが大事、って感じている。そのためのささやかな練習の場を続けていくことも、前以上に、大切な意味がある、と思えている。

きもちを仲間に

東京の、不思議なレストラン、ことクッキングハウスでのSSTに私がたびたび参加していたことと、わが家に集う仲間たちの間で、コミュニケーションを学びたい、という声がいくつかがあったこと、それが7年前の「ともの時間」の出発だった。

SSTの中でもとりわけ大事な、相手の等身大を認めることやほめること。そのひとの今できていることを、具体的にシンプルに、きもちを添えて伝える、ということ。たったこれだけのことで、ともの時間みんな、慣れない最初のうちはすごくむずかしかった。家族ときもちのいいコミュニケーションをかわせるようになりたくて集まってきたにもかかわらず、そんな言葉を仲間うちで言うのも言われるのも、照れくさくて、はずかしくて、ぎこちなかった。

クッキングハウスの練習風景を何度も見てきて、スタッフからメンバーさんへ、またはメンバー同士、あんな自然にちいさなほめ言葉がいきかうのは、慣れももちろんあるだろうけど、それ以上に、声かけする言葉のハードルを世間にあわせてないこと、相手を実によく見ていて、その人のいいところや今できているところを見逃さないこと、そこがポイントなんだ、って、ともの仲間たちのリアクションを見ながら、逆に実感した。

スタートはそんなだったけど回を重ねるうち、とものメンバーたちもだんだんと仲間への言葉かけが自然にできるようになっていく。

「そんなつらいことがあったんだ。長いことよくよくがんばってきたね」

「仲間になってくれてありがとう」

「ここで逢えて、うれしい」

「今日、すごくいい笑顔だよ」

「あなたの今の言葉で気づかされた。いいヒントもらえた、ありがと！」

といった風に。ひとの話をよく聴くことと、自分のきもちを表現することを、毎回のともの時間の練習で、仲間たちは少しずつ身につけていったように思う。

いいところ見つけはむずかしい

そうやって仲間うちでは言えるようになって、次にそれを家族に返していく段になるとまたまた、むずかしかった。

「この前、ともの時間から帰ってさっそく息子をほめてみたんだけど、何だよ、わざとらしい、とってつけたみたいだ、って言われちゃって……」と翌月、報告するお母さんのへこんだ様子に、みんな大笑い。今までおよそそんなこと口にしてこなかった分、言葉から態度から、もろ、借り物なのが息子さんにバレバレだった、というあたり、とても他人ごととは思えなくて、みんなで笑っちゃったのだった。

「だけどトライしたことはすごいよ、これまで自分がしてこなかったことにチャレンジしたんだもん。はじめてだからうまく行かなくて当たり前、だからここで練習してるんだし」と、私。

もう十分に大人の、しかもそれぞれに悩みや苦しみをかかえて足踏みしてる息子なり娘なりを「ほめる」って、それはそれはむずかしいに決まっている。そもそも、なにをほめるか、相手のどこを見るか、息子／娘、または家族の誰かの、今できてるいいところ、って何か。

ともの仲間たちに最初のうち共通していたのは、ほめる＝いいところをほめる、いいところ＝人よりできる、すごい、がんばっているところ、というのが、誰かをほめる時の尺度だったこと。英語のdoとbeでいうなら、相手のdoを見つけよう、見つけよう、としていたことだ。

その目でみると、つい、世間一般や同じ年代のほかの子たちと比べたくなる。または、その子がしんどくなる前の、親の目から見ればいいところいっぱい輝いていたようにみえる、高校時代や会社で働いていたころと現在を比べて、あのころはできることがあんなにいっぱいあったのに、今のあの子は、あれもできない、これもできない、と思いたくなってしまふ。

たまたまそんなきもちの時、とりわけつらい体験をしたとも仲間の誰かが、「でもさ、いま息子

さんが生きてるってことが、もう十分にすごいことじゃない?」「そうそう、現に死なないでいてくれるって、相当にがんばってることだと思うなあ」などと言ってくれることで、世間的いいことの評価から、本質のいいこと——いのちがある、いる、be、存在していることへと、ほんの少し、子どもの見方を変えられる。少なくとも、ともの仲間という間だけでも。

やがて、「そういえば……」と前置きつきで、この前、あの子こんなこと言ってた、こんなことしてくれた、と、少しずつ見つけはじめる。見ようとしなければおそらく見えてこなかった、子どものいいところ。相手のきもちをわかりたい、とこちらが願わない限り、気づくことのできなかった、その子のやさしさや哀しみや切なさ。

「ほんとは、家族中であの子が一番やさしい、ってわかってきた」

「いつも私を気遣ってくれてる、見ててくれる。家の中に一人でもそんなふうに分を気にかけてくれる人がいるのを知ってる、ってうれしいことだよ」

「ともの時間に行ってきたいいよ、って今日は娘の方から言ってくれた」

「外に出れない時期もあったけど、ほんとはあの子、ひとが好きでよかったんだ」

仲間の前で素直に、自分が見つけたわが子のいいところ＝すてきなところを、こんなふうに分を伝えてくれるお母さんたちの顔は、どの顔もとってもいい表情だ。

見つけるのも伝えるのも、練習が必要

いつも思うけど、人のいやなところや気になるところは、どうしてこんなにたやすくいっぱい見つけられるんだろう。いいところは、その人に関心や愛情を持たないと、そしてよく見ないと、なかなか見つけられない。

とりわけこれまでdoの部分しか見てこなかった人には、beを含む、ちいさないところ見つけの感度を磨く必要もあるみたいだ。その分、見つけられた時はそのうれしさが自分に還ってきて、それ

をともの仲間たちに話す時、いい顔になるのだと思う。

そうやってわが子のいいところを見つけても、今度はさあ、どうやって伝えよう。さりげなく、何気なく、自然に。ともの時間ではその練習もした。自分で言ってみてどんなふうに分を聞いたか、仲間たちにコメントしてもらおう。時には、自分が息子役、娘役をしてみても、どう言われたらうれしいか、心に響くか、それともわざとらしくなかったか、それも体験してみてもはじめて気づくことだった。

あるお母さんがこんな話を聞かせてくれた。——いいところ見つけのコツ、みたいなのはなんとなくわかってきたんだけど、家で実践しようとするといつもタイミングをはずしちゃう。娘が部屋を出てった後で、あ、今あれを言えばよかったんだ、このことも言えたのに、って何度も失敗。

でも失敗したら余計に、次は言うぞ、言いたい、きつと言う！って思えてね、ついに言えた時、うれしかったあ。今思えば、全然なんてことない言葉なんだよ。「あら、うれしい、お茶入れてくれたのね、ちょうど飲みたかった、ありがとう」とか、「針目が、前よりずいぶんいいに揃ってきたね、とてもきれい」とか。

ごくちいさなことでいいんだよね、見つけたら、思ったら、そのまま言えばいいだけってわかってきた。こんなに簡単なことなんだけど、いいところ見つけるにも、伝えるにも、けっこう練習が必要だったんだね。

そうそう、こういったちいさな試みが、段階を踏んで、それぞれのおうちで活かされていくのを、その後何度も聞かせてもらった。はじめのうちは、いいところ見つけるのとそれを伝えるまでにだいぶ時差があったけど、慣れてきたらどんどんその差が縮まってきた、というあたりも楽しい。

そのころからもう数年たって、先のお母さん、今はとくに意識もせずに、娘さんの等身大を認める言葉を贈り、娘さんもお母さんの前でとてもリラックスしているらしい。娘さんが、お母さんのいいところを見つけて言ってくれる時もある。たわいもない話に親子でもりあがって、大声あげて

笑いあう時間もいっぱいふえたそうだ。

チャンス逃さない

普段は部屋にこもっている息子さんが、ある時めずらしく下に降りて来て、お母さんとなにげない茶飲み話をいっぱいして、また自分の部屋にあがっていったという。

「あとで時計見てびっくり。2時間もしゃべってたの！あの子のほうからほそほそ話したので、横どりしない、邪魔しない、指示しない、まっすぐに聴こう、って自分に言い聞かせて、うん、うん、って聴いていたらそんなに時間がたった。すごく平和で、いい時間やった、ここで聴く練習してきたおかげやわ〜」

とうれしそうにとも仲間たちに話してくれた。こういう「うれしい」をみんなで分けあえる時間もまた、いい。

「よかったねえ〜、そりゃ貴重な時間だったね。で、息子さんが席を立った時、なんか言ったの？」

「え？……あ！忘れてた！うれしすぎて、言うの忘れてた、う〜ん残念！」

ここでまた、みんな大笑い。ありがとうを言うチャンス逃さないようにしようね、ととも時間でよく言いあってるけど、日ごろ言ってないとやっぱりとっさには出てこないものなんだ。

一緒に笑った後で、このお母さんがしみじみ言った言葉が印象的だった。「家族間で、こんな場面に、ありがとうとか、なにか言うとか、そのきもちを言葉にする、って発想が、そもそもうちにはなかったんだね」と。

仲間たちに話さずにおれないくらいうれしいことがあった時、そんなきもちにさせてくれた当のご本人に、そのうれしさを伝えられたらいいよね。そんな場面、ひょっとしてまたあるかもしれないから、ちょっとやってみようよ、とその場でさっそく練習してみる。

次に同じようなことがあった時、何て言いたい？

「あんたにしちゃめずらしい、今日はいっぱい話したね、っていうかな」

そっか……でもそれってちょっといやみっぽい

かも。前の部分は無しにして、ただ素直にわたしメッセージで言ったらどうかなあ、と仲間からつつこみがはいる。

よくあるよくある。普段めったにしないことを家族の誰かがしてくれた時、内心うれしいのに、なぜか口をついて出てくる言葉は逆のことが多い。「へえ〜めずらしい、雪降るんじゃない？」とか、ちょっとしたことをほめた時に「別に何も出ないからね」とか。

ため 体で試すこと

そんなことによるこぶほどお人好しじゃないよ。そのくらいのほめ言葉、真に受けてうれしがったりしないから。それは照れ隠しだったり、あるいはそうやって自分を守ってきたのかもしれないけど、少なくともきもち見せあう仲間の前では、きもち交わしたいと思ってる家族の前では、もっとシンプルでいいんじゃないかと思う。そして、そういうややこしいコミュニケーションが身につけるひとは、それをシンプルにしていくにも、またまた練習がいる。

「あら、もうこんな時間、いっぱい話したね」

「いろいろ聞かせてくれてありがとね」

「いい時間だった、また話そうね」

いくつか出された言葉を自分から、息子役をしてる何人かに言ってみる。おおげさでなく、さりげなく、でも本当のきもちを添えて。

練習の中で自分の口から出た言葉が、自分にとってもし心地よかったら、その心地よさをからだのどこかは覚えていて、ある日、日常のどこかでふいに言えちゃうことってけっこうあるものだ。実際に言ってみて体験するのと、こう言えばいいんだな、って頭だけで理解することとは、確かに違う。体で試した^{ため}ことって、かなり後まで残っている。

とも時間でよくする、最近の「ちいさなうれしい」を話す／聴くをしていた時、「息子が、今日は飯いらない、ってめずらしく外から電話をくれたこと」というのがあった。言われたお母さん

は、その電話がうれしかったのに、返したのはいつもどおりの「あ、そ。じゃ気をつけてね」だった。

そうか、この時も、「連絡くれてありがと」って言えたんだ。考えてみたら、こんな場合にありがとと言うなんて、これまで思いつきもしなかった。あの子ともっと話したい、といつも思ってるのに、こんなところが抜けてたんだね。そう気づいたこのお母さん、それからはずいぶん、ちいさな「ありがとう」を言うことがふえたそうだ。

ありがとうを言う発想のなかった人が、ありがとうを言う。これまで出してこなかったうれしいきもちを、少しずつだけど、今は言葉や表情で外に出している。たったこれだけのことなのに、家族の中で何かが変わってくる。現にこのお母さんと息子さんの会話が、前とは少し違ってきたとうれしそうに話してくれた。

家族って、必ずしも連帯してなくても、連動している有機体だ。ぴりぴりしていた家の空気が誰かのありがとうで、ほんのすこしやわらかくなることだってきっとある。ともの仲間たちは、家族間のささやかな変化やいいところを見つけをするのが、そして、ありがとうを言うチャンスをつかむことも、ゆっくりゆっくり、本当に上手になった。

ありがとうのリレー

心の病気のご家族を持つ方たちのところへ、コミュニケーション・ワークショップの出前に何回か連続でうかがった。出前先ではいつも、毎月のともの時間でしているようなことを順を追ってしてみる。仲間たちが実践して気づいていったことが、ほんのちょっとでもみなさんのヒントになればいいなと思いつつながら。

ある時、お子さんが言ったことやしてくれたことで、何かうれしかったことってありますか、ちいさなことでいいので、思い出して書いてみてください、とお願いしてみた。書いたことをそれぞれ発表した後で、今度はそれを自分のせりふにして、最後に「～ありがとう」で終わる文章に書き換えてもらう。

あえてこんなめんどくさいことをするのは、何

か具体的な場面がイメージされていないと、せっかくのありがとうが、単なる記号になってしまう場合もあるからだ。ましてその日は、お年を召した方が多くて、ワークショップにもなれていない様子、手順をはしよらないでいねいにした方がいいと思ったのだった。

みなさんが書いてくださったのは、お子さんへの、いわばちいさなラブレター。いったん集めて、シャッフルして、それから束にして、こうお願いした。どなたか何人か、前にでて、この紙に書いてあること、私と一緒に一枚ずつ読んでいただけませんか。

はい！と一番に手をあげたのは、前回は参加してくださった70歳くらいの男性の方。最初は気難しい顔してらしたのが、前回の終わりごろには表情も柔らかくなって、コミュニケーションの時間を楽しんでくださっていたのがわかる、その変化が印象的な方だった。

前に出た4人で順番に、ここにいる誰かが書いた、わが子に贈る言葉を読んでいく「ありがとうのリレー」。何巡かしてまたその方の読む番が来た時に、あ、と小さく声をあげて、こう言われた。

「自分の書いたのが来ちゃいました、どうしましょう」

「そうですか、もしもお差し支えないようでしたら、ご自分で読まれます？」

はい、とおっしゃってその方が読みはじめた。昼夜逆転の息子さんにむけての言葉だった。

「このごろ時どき、お父さんのことを気遣って、眠らせてくれることがあるよね。お父さんはそのことに気がついているよ——ありがとう」

最後のありがとう、に行きつく前に、その方は涙ぐみ、言葉につまり……。それは、とってもやさしいありがとうだった。あたたかいものが胸に満ちてきて、私までなんだか泣きそうだった。その部屋ぜんたいが、参加してるひとたちからのあたたかなため息で、やさしい空間になった。

この日参加されたみなさんの書いた言葉が、直接、相手に伝えられる、その可能性はもしかしたら少ないかもしれない。ありがとう、を言い慣れていない家族の間では、ありがとう自体が、ハードルの高い言葉なのだろうから。

だけど、こういったありがたいのきもちが自分の中にある、とご自身が気づくこと、それを一回でもこうやってみんなの前で外に出したこと、それだけでもすごいことじゃないか、と私には思えたのだった。

キルト「ちきゅう」

さて、話は変わって。



ここにある一枚のまあいいキルト、名前は「ちきゅう」。ミチコさんという「紅茶の時間」仲間の一人が今から22年前に縫ったキルトだ。

彼女と私は、原発のおかげで出逢った。チェルノブイリ後の紅茶の時間では、おさな子を抱えたお母さんたちが毎週集まってきて、原発や放射能の話をつづいていた。以前から原発に強い危機感を抱きながら、でもそんな話のできる場ってどこにもないしなあ、と思っていたミチコさんが、ひとつづつに紅茶のことを聞き、文字通りすつとんできて、仲間になったのだった。

針と糸の得意なミチコさんならではの発案で、キルトでも原発に意思表示できるよ、「かざぐるまフレンドシップキルト」づくりにあなたも参加しませんか、と紅茶から出している通信でよびかけた。20センチ角の布に、一人一人が原発や核に対するメッセージを縫い込み、それを4人分縫い合わせると、その合わせ目が4枚羽根のかざぐるま

になる。そうやって100人分をつないだたて横2メートルのおおきなフレンドシップキルトは、最終的には1万人以上のひとが参加して、80年代の脱原発の、知るひとぞ知る、ささやかなムーブメントになった。

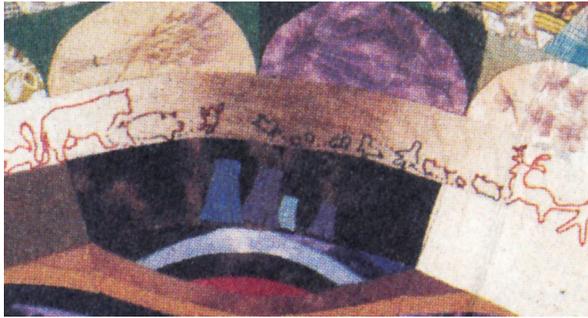
当時の空気は今とだいぶ違って、原発に異を唱えるのは一部のとくべつなひとたち、といった見方が普通だった。それだけに、キルトでも原発にNOって言えるんだ！というあたらしい発想からずいぶん勇気をもらえたとし、また実際にキルトとキルトをつなげる、という細かい手作業をとおして、私たちは日本各地のひと、とくに女性たちと、エールや情報や連帯感をいっぱい共有しあっていたのだった。

1枚目のフレンドシップキルトが出来あがってほどなく、ミチコさんは「ちきゅう」をつくりはじめた。

太陽にもマグマにも羅針盤にもみえる真っ赤な輝きを中心に、写真ではおそらくははっきり見えないうけれど、その外側が幾重もの輪になっている。魚たちの輪、連なる波のうねりの輪。地球46億年の「せいめいのれきし」の輪は、さながらバージニア・リー・バートの絵本のキルト版だ。

地球上のいきものたちがひと筆書きのように手をつないでいる「いのちの輪」。その次の輪は、四季の草花、それから山の木々。キルトのてっぺんの、午前0時、3月、北の空からはじまる一年の暦、12ヶ月のものがたり、めぐる星座、そして地球をふくむ太陽系の惑星たち。

私たちの星はこのおおきな宇宙の中にあって、いのちの輪で描かれているように、ひとと動物も虫も草花たちも、すべてのいのちとつながって、支えられ、助けあって生きている。だけどよく目をこらせば、「せいめいのれきし」の最終章に出現する人間が歩いて行くその先に、原子力発電所があり、そこで爆発がおき、放射能が飛び散ってしまったせいで、いのちの輪のつながりの一部分だけ、断ち切られている、ヒト、コドモ、ニワトリ、ブタ、タマゴが……。海の波も魚も、収穫の麦の穂も、放射能の汚染で色が変わっている。



文字も言葉も使わずに、これが、私たちのいま生きているチェルノブイリ後の星なのだと、そしてフクシマ後の星なのだと、まさしく曼荼羅の「ちきゅう」キルトは、見るものにいろいろなことを考えさせ、同時にとても深いメッセージを送ってくれている。

キルトからの贈りもの

もし今年の3.11がなかったなら、「ちきゅう」がこのページに登場することもきっとなかったろう。私自身もだいぶ長いこと、原発の問題から遠のいていた。けれどこの春以降、原発のおはなしの出前にまたお声がかかるようになって、4月からはできる範囲であちこち出前に行っている。

その時はいつも、20年前もそうだったように、必ずこの「ちきゅう」をミチコさんから借りて、キルトと一緒に旅をする。原発のこと、言葉だけでなく、感性でも感じ取ってもらいたい、と願う私にとって、「ちきゅう」は昔も今も、大きな助けだ。

今年の春、ミチコさんは、治っていたはずの病が再発して、病院で必死に闘っていた。少しでも調子がいい日は、「今日も院内脱原発運動してるよ、チェルノブイリより後に生まれた若いナースさんや、話せそうなドクター相手にね！」などとメールがくる。私は旅の先々で「ちきゅう」とツーショットを撮っては携帯で写メールを送った。東京から、川越から、京都から、時にはすごく近い金沢から。

そんな5月のある日、ミチコさんは「ちきゅう」を、紅茶の時間に託してくれた。「こんな古いキルトがまた誰かの役にたてる、ってうれしい。しあ

わせ。もうこのキルトは、私だけのものじゃなくて、みんなのもの。だから紅茶に寄贈したいの、受けとってね」と。

その後、前回の「紅茶の時間とその周辺」で書いた原発の話を、団編集長からお許しもらって、そこにさらに文章を書き足し、大急ぎで『いのちの未来と原発と』という小々冊子にまとめた。在庫はたちまちなくなり、次につくる改訂版にはきっと「ちきゅう」を入れるからね、とミチコさんに勝手に約束した6月のその日、彼女は逝ってしまった。

7月末、東京近辺に原発のおはなしの出前に行く前日。私たち親子の作品を扱ってくださっている銀座の画材店さんに、お土産がわりにお持ちしたのが、「ちきゅう」のカラー写真とこの曼荼羅を読み解くものがたり付き、『いのちの未来と原発と』改訂版の冊子だった。背中のリュックの中味はもちろん、本物の「ちきゅう」。



「ちきゅう」を見た若いスタッフから突然、思いがけない言葉が降ってきた。「スウさん、このキルトの前で原発のお話をしてください、ちょうどお盆のころ、うちの画廊があいてるんです！」

え？何を言ってるの？私は目を白黒させた。スタッフさんは本気だった。彼女自身が、あの日以来、原発のこと、これからの生き方のこと、すごく真剣に考えるようになったという。「お店に見えるお客様もです、みなさん、あの日から何か変わってきてらっしゃるように思うのです。考え方というか、方向性とか。だからこそ、ギャラリーでのおはなし会、ぜひしていただきたいのです」と、わたしメッセージで迫ってきた。

大きな深呼吸を何度かして、少し頭を冷やして考えてみると、これって実にもものすごい提案だと思った。大切な亡き友のキルトが、東京の銀座でいろんな人に見てもらえる、しかもこの年の、今この時期に。

今号の最初に、「奇跡みたいな日常」と書いたけど、こんなまたとない奇跡はとくに逃してはいけない。よしっ、それなら、ミチコさんの遺した賢治の童話世界のキルトもかざろう。わが家で預かっているかざぐるまフレンドシップキルトも全てかざろう。娘のこれまでの作品も、生まれたてのブックレット『贈りものの言葉』も、私の古い本たちもならべよう。私は「ちきゅう」キルトの前で原発を語り、「よだかの星」のキルトの前で賢治のその童話を読み、ミチコさんのことを語ろう。タイトルは、そうだ、「つながる3人展——紅茶の時間 in 月光荘」だ。

wonder が、いっぱい

そう決めて、出前先から戻って、3人展の搬入の日まで10日しかなかったけれど、まわりの誰もが、そして東京近くの紅茶仲間たちも、びっくりしながらめっちゃめっちゃよるこんで、いっぱい力を貸してくれたおかげで、無事に実現することができた。そして3日間の会期中、思いがけないほどたくさんの方が見にいらして、キルトからのメッセージをそれぞれ受けとってくださった。

その中には、「僕は行けないけれど」と最初言っていた、ミチコさんのおつれあいさんもいらしたのだ。ちょうど新盆でもあるし、そんな時期に泊まりがけで家を空けられないのは常識からすれば、百も承知。だけど、もしももしも見にきていただけたなら、どんなにミチコさんはよろこぶだろう、誰よりも彼に見てもらうのが一番うれしいにきまっているもの、と実は内心ひそかに願ってもいたので、「行きます」と告げられた時は、私も飛び上がりたいくらいうれしかった。

その東京行きのわけ、について、あとからこんな風に話してくださった。

——これまでの僕は、感情を表に出すってことをあまりしてこなかった。でもミチコは何かうれしいことがあった時、いつもからだ全体で、うれしい！って表現してたでしょ。そのこととね、今回、東京に行こうと決めたことと少し関係がありそうに思うんで、ちょっと聞いてもらってもいいです

か。

ミチコが亡くなってしまった。これは事実。今はまだ全然その実感はないけど、でもこの先、僕はいったいどのように生きて行ったら、ミチコと一緒に生きているという感覚をずっと持ち続けていけるのだろうか、ってことを考えてみたんです。

スウさんと月光荘さんのおかげで、ミチコのキルトが銀座にかざられる。こんな時、ミチコならどうするだろうか。文句無しに、行くに決まっている。そして、あ、そうか、と思った。彼女ならここでどう感じるかな、どう判断するかな、そうやってミチコのきもちになって僕がその行動をとることで、もしかしたら僕の中でミチコを生かし続けていくことができるかもしれない——ふっとそんなふうに思えてきて、僕は行くことにしたんです。

あ、でも誤解しないでくださいね、ミチコがとるだろう行動を僕の規範にする、っていっても、別に自分を無しにするとか、自分を変えようとか、そんなことまったく思ってませんから。

すみませんね、どうも変な話しちゃって。僕の言ってること、わかります？

はい、と私は深くうなずいた。おつれあいのきもちが痛いほど伝わった。わかる気がした。娘の幼いころから、家族ぐるみでつきあってきたミチコさん夫婦。このご夫婦なら、遺された者がそんな風に思うことも、行動することも、とても自然なことに思えた。

その上、こんなことを言うおつれあいだから、なおさらそう思えるのだ。

「たくさんの方が、ちきゅうキルトやよだかの星のキルトを見て、すごい！って言ってくださったけど、あのキルトはミチコのdoであって、僕にとっては、それよりもミチコのbeが、まさに存在そのものが、っていつも思っているんです」

人生の日々は、不思議がいっぱいだ。wonderに満ちている。そのwonderには、うれしいことも悲しいこともつらいこともいいこともさみし涙もうれし涙も、いっぱいいっぱい入っている。だからwonder + ful、って思うのだと思う——という

話を、3人展のおはなし会でさせてもらったけど、それを聴いていたミチコさんのおつれあいは、この言葉にすごく共感してくださったようだ。

おつれあいがミチコさんのきもちを想像しながら行動するようになってからというもの、毎日、不思議なことや奇跡みたいなことの連続なのだと言う。これまでは出してこなかったきもちを外に出すことで、今までしてこなかった行動をとることで、きっとこれから先もまだまだ知らない自分を発見していけるのだろう。それはまた、おつれあいの中で生きるミチコさんが見せてくれる、あたらしい世界なのかもしれない。

2011.8.25

